

平成20年度卒業式 学長式辞

愛媛大学長 小松 正幸

本日ここに平成20年度卒業式を挙げるにあたり、学位記を授与された1,911名の卒業生の皆さんに、心からお祝いを申し上げます。また、本式典にご出席をいただきましたご家族、ご関係の皆様に対して、衷心よりお慶びを申し上げますとともに、日ごろからの本学に対するご理解、ご支援に対しまして、この機をお借りし、深く感謝申し上げます次第であります。

本日のこの晴れの式典には先ほどご紹介させていただきましたように、各界を代表する多数のご来賓の皆様のご臨席を賜りました。ご多忙にもかかわらず、ご臨席を賜りました皆々様に厚くお礼を申し上げます。

卒業される皆さんがこの4年間あるいは6年間、さまざまな困難や試練を乗り越えて、今日のこのときを迎えるに至った努力をたたえるものであります。同時に、苦楽をともにした友人、先輩や後輩、指導教員や職員の暖かい支えがあったことを決して忘れてはなりません。大学で自らが得た知識や技能のみならず、このような人間関係や人々との交流の経験は、これからの人生の糧となるものであります。

今年本学を卒業する皆さんの大部分は就職し、社会に巣立って行く訳ですが、大学卒業は人生の一つの重要な節目であり、新たな社会人としての旅の始まりであります。その節目にあたって、自分のなすべきことは何かを考え、目標をしっかりとって努力すること、このことにぜひ取り組んで欲しいと思います。

また、443名の卒業生は大学院に進学し、さらに学生として研鑽を積むこととなりますが、大学院に入学することも社会に巣立つと同じように一つ大きな節目であります。大学院では学部での勉強や研究とは質的に違う広い領域の知識を修得し、高い見識と能力を養うことが求められます。

社会に出る卒業生も大学院に進学する卒業生も、ともに、自ら学ぶ姿勢を常に堅持し、本学で培った知の力をさらに向上させて欲しいと思います。皆さんの経験した大学における学習は単位の取得を伴う授業や実験実習、卒業

研究などばかりではなく、自主的な学習、個人的な学習が大きな比重を占めています。本来、学習は個人個人によって同じ領域を対象としても興味のもち方や問題意識、学習の方法やそれによって獲得する内容も深さも異なるものであり、極めて個人的な営為であります。学ぶことが個人的行為であるということは、個々人が自分の意志で学ぶことが求められます。自分で問題を見つけ、自分で学ぶことができる能力、すなわち自主的学習能力が大学で皆さんが得た大変重要な力であります。この力は社会においてさらに、生涯に渡って学習を継続する能力として高められることが期待されますが、このような生涯学習能力がこれからの社会ではもっとも必要とされる能力であります。

今日の社会は経済的な視点からは知識経済といわれますが、この意味は知識が最も重要な資源ということであります。知識を継承し、新たな知識を創り出すのは人ですから、人の知的活動が最も重要になる社会です。知識はいくら使っても減る事はないばかりか、使う事によって新たな知識を付け加えることができます。知識経済においては知識を獲得し、蓄積するとともに、それを使うことによって新たな知識形態に変換するプロセスを学習といっておりますが、このプロセスはまさに皆さんが大学で経験したことであります。もちろん社会において必要な知識は大学で学んだものとは大きく異なるでしょう。

社会に出れば皆さんはまた別の課題、問題について学ぶことが必要です。社会に出ると学生時代には思いもよらなかった経験に遭遇し、また、いろいろな人が自分の新たな能力を引き出してくれます。これからの5年間は最低限、社会人になるための勉強の期間です。実社会の仕事とはどういうものか、社会人としての行動の仕方、人との関係はどのようにしたらよいか、自分に必要なものは何か、どのような知識が必要か、知識をどう活用するか等々、皆さんが社会人として自立してゆくために学ぶべきことは沢山あります。仕事の中で学ぶ、これをオン・ザ・ジョブ・トレーニングと言いますが、入社後の5年間はまさにこのトレーニングの時期と心得、何でもやり抜くことが肝要です。

さて、皆さんは卒業を目前にして、世界的経済不況という新たな試練に直

面する事になりました。我が国はこの数年、グローバル化の急速な進展、ブリックスなど新興国の追い上げと材料やエネルギー資源の異常な高騰の中で、我が国の得意とするものづくり産業は厳しい競争にさらされてきました。しかし、独自の高い技術力をもってこの困難を乗り越え、新たな経済的発展の道をさぐり、先行きにはわずかながら光明が見えた矢先でありましたが、ここに来て突然降り掛かった災難とでもいうべき大不況の波に襲われました。

この度の世界的な不況は金融危機にその源があることはご承知の通りであります。私はこの未曾有の金融危機の本質的根源は、その発祥の地であるアメリカの驚くべき貧富の差にあると思っています。低所得者、貧困者層向けの極めてリスクの高い住宅や自動車などのローンを証券化し、世界中にばらまき、異常な証券バブルを引き起こした巨大な貪欲エネルギーは、アメリカ社会の貧富の差がもたらした巨大な歪みエネルギーに他ならないと思うからです。

ここに一つの教訓があります。国内および国と国との間の格差はそれを解消し克服する志向をもつ限り、社会的政治的経済的に健全なエネルギーとして作用しますが、それを利用して利を得ようとするれば、それは却って格差を拡大する方向に作用します。ですから、私たちが向かうべき方向は国家間においても一国内においても、人々の間や地域間の格差をできるだけ小さくする、すなわち、歪みエネルギーを最小にすることです。私は将来を担う若い人たちにこのことを強く訴えたいと思います。

と同時に、現在の困難はどんなに大きく見えても、必ず克服できるものだという確信をもって欲しいと思います。皆さんの成長期は、我が国ではバブル崩壊後の経済的に厳しい時期であったし、地方ではそれ以後ずっと困難が続いている状況でありましたから、今回の大規模な世界的不況を受けて絶望的な気分にも襲われることもあるかもしれませんが、長い一生の間にはこのような困難な時期は何回かありますし、永遠に続くことは決してありません。

このような人生の中で何度となく訪れる社会の転換期に、社会のあり方、そのなかでの自分の振る舞いについて確固たる信念に基づいて冷静にこの社会に対面する必要があります。激しく変化する社会、先行き不透明な社会に

あって、理想を忘れることなく、今できることできないことを見極め、今できることの中に希望を見出して、機敏に対応する能力を養うことが必要です。これからの社会にとって最も必要なものは、変化に対応できる人材です。世の中の変化に対応し、常に問題意識を持ち、より早く、深く、広く考え行動することができる、このような人材が最も貴重な財産なのです。その上で皆さんは個人的な利害にとらわれ、あるいは、個人的な興味の中に埋没することなく、社会の経済的な発展や、進歩のために多くの人と力を合わせる努力をして欲しいと思います。

国立大学の法人化後、私たちは「学生中心の大学」「地域にあって輝く大学」「地域から世界に向かって発信する大学」をつくることを目標に、自主的自律的に大学の改革を進めてきました。この大きな目標に向かってこの5年間その実践に取り組んできたところですが、本学は極めて順調に改革を進め、教育・学生支援、学術研究など、すべての点で高い実績を積んできました。今や、愛媛大学は大学の使命である教育、学術研究、地域貢献、国際貢献のすべての分野で大変大きな成果を上げ、高い評価を受けております。愛媛大学はいま最も注目される大学の一つになっていると言ってよいでしょう。しかし、愛媛大学の発展はまだ途上にあり、これからも引き続き本学の改革に取り組み、皆さんの期待に応えて行くことが必要だと思っております。特に、この地にある大学として、愛媛県の発展のために人材育成と学術創成の拠点としての役割を十分に果たすことが求められておりますが、この面での改革は意識改革を含め大きな課題として残されております。そのような中であって、今年の卒業生を含め、多数の卒業生がこの地に就職され、また、少なからぬ同窓生が重要な地位を占めて活躍されていることは心強い限りであります。

また、県外に就職する人、特に、首都圏に赴く人たちには日本の社会の健全な発展のために、この大学で培った能力と見識を十分に役立てて、存分に活躍をしていただきたいと思います。そして、さらに力をつけた段階で、転機が訪れることもあるでしょう。その時には、今度は地方に帰って、その培った力を地方の発展のために役立てていただきたいと思います。願っております。

卒業生の皆さんが愛媛大学校友会の一員として、同窓生のみならず本学と

のつながりを持ち続け、愛媛大学の輪を広げていっていただくことをお願いいたします。そして、皆さんが困難にくじける事なく、未来の可能性に果敢に挑戦し、縦横に活躍されますことを心から祈念いたし、はなむけの言葉と致します。